

**(3) ②様式第3号-2 (報告書)**

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 福岡教育大学大学院教育学研究科（教職大学院）・宗像区（宗像市教育委員会、福津市教育委員会）
	事業名：【NITS・福岡教育大学教職大学院コラボ研修】
	自律的な学びのコミュニティの構築-コーチングと対話活動を通して-。
	開催日時：①令和7年8/29,9/12,10/31 いずれも18:00～19:30 ②令和8年1/21,14:00-16:30 ③定期的、加えて12/16 開催場所：福岡教育大学（福岡県宗像市赤間文教町1-1） 参加人数（総数）と参加者の属性：49人（宗像区32人、教育事務所3名、主幹教諭を除く壮志会メンバー4人、院生8人、関係の管理職2人）

**目的：**自律的な学びのコミュニティの構築・成長を意図し、コミュニティの核となる教師を育成することが目的である。そのために、自己探究に基づき、自律的に学ぶこと、「悩みを共有し話し合おう」（「NITS からの提案」p.3）とする意識と言葉と方法を獲得するためのステップ、および、公開研修会を実施する。ステップとするのは、対話活動とコーチングである。

**内容：**※全体発表の内容をテーブ起こしするなど、具体的に記載すること。

- ① 全大会までのコーチング研修について
  - 8/29：コーチングの概要と解決思考のコミュニケーション
  - 9/12：コーチングの基本プロセスとGROWモデル
  - 10/31：コーチング演習と今後の実践行動と全体の振り返り
- ② 全大会 1/21 14:00-16:30

令和7年度 宗像区 小学校主幹教諭・教務主任研修会 (第5回) 実施要項

日 時	内 容	進 行 氏
1 8:30-9:00	開会式 研修の目的と意義について	宗像市立玄海小学校 校長 藤田 隆
2 9:00-9:30	研修の目的と意義について	福岡教育大学 教職大学院 藤田 隆
3 9:30-10:00	コーチングの概要と解決思考のコミュニケーション	福岡教育大学 教職大学院 藤田 隆
4 10:00-10:30	コーチングの基本プロセスとGROWモデル	福岡教育大学 教職大学院 藤田 隆
5 10:30-11:00	コーチング演習と今後の実践行動と全体の振り返り	福岡教育大学 教職大学院 藤田 隆
6 11:00-11:30	閉会式	宗像市立玄海小学校 校長 藤田 隆

福岡教育大学大学院教育学研究科棟 G1 教室。  
講評は、宗像市立玄海小学校福田校長が実施。

- ③ 読書会
  - 院生で定期的実施。そのうち、12/16については、著者を招聘（山寺香『誰もボクを見ていない』はオンライン、四宮淳平『居場所難民』は対面で実施した。

**成果：**※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載すること。

自己についての見出しがなされている。

その上で、coaching を試みることにより、組織の「空気」「質」の変容を感じている。

また、coaching の効果だけではなく、今後継続するために何が必要かを主幹教諭が考えていることがわかる。

具体的には、研修資料の作成、相談できる窓口などであり、今回のコラボ事業を契機として、組織の「空気」「質」に取り組もうとしている様子が見出せる。



## 「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

今回の取り組みでは、対話活動とコーチングを活用した。そのことは、「コミュニティの核となる教師」の育成や、職場での悩みを共有し話し合おうとする意識、自己の「在り方」の発見や問い直しに寄与したと思う。今回対象とした主幹教諭は、「コミュニティの核となる教師」として位置づけることが可能である。そのため、彼らが相互に学び合うコミュニティの構築に向け、coaching を学び、他者との対話を積極的に行うことができれば、教職員の孤立の防止、「風通しの良い職場風土の形成」「学び合いのコミュニティ」を構築する可能性が高いと思われる。また、彼らは、この研修の後、今回学んだことが継続できるようになることを望んでいた。そのための教材作成や相談窓口があるといいという内容である。ゆえに、NITS においてもコーチングの教材が提示されると現場は活用しやすいのではないだろうか。

**アイデアや工夫したこと：** ※実際の様子により分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明すること。

① 継続的な実施。全大会に向け coaching 研修を 3 回ではあったが、実施した。それにより、土壌が耕された。また、読書会も定期的に行うことによりコミュニティ構築に向けた具体を集積できた。

② 全大会では、①に基づき、講師（石川尚子）を招聘して資料を用いた実践を行った（その際の資料は、著作権の関係もあり本稿には記載しない）。その後での協議では、coaching の経験者がグループの中に位置づけた。これは理論と実践、そして経験者から実際に聞くことになり、効果的であった。また、「コミュニティの核となる教師」とコミュニティ構築に関する事例を院生が 2 名行った。それにより、コミュニティやメンバーの役割、具体的な動きなどの理解につながった。

【当日のプレゼン資料（抜粋）】



③ 読書会では、特に不登校や教育と福祉の連関について協議した。その結果、学びの多様化学校のスタッフの専門性の伸長や教師が気づくためのセンスや機関とつながるための知識の必要性などが出された。それを受けて、後日、福岡市子どもアドボカシーセンター、不登校支援の担当者を招聘した学びの会を実施することにつながった。なお、山寺氏とは事前に 1 時間の打ち合わせを行っている。

【当日 12/16 の写真】



④ NITS とのコラボ事業においては、共著（若木・榮・太田）で、「自律的なコミュニティの構築に向けた取り組み事例」として、コラボ事業、榮の学校での実践、太田のコミュニティ構築の 3 点を整理・考察したものを本学の「年報」16 号に投稿する。